

Facebook 活用法：私の場合

音楽科 教授 田中多佳子

はじめに

このような特集があったら是非読んで勉強させていただきたいと思う私が、何故、書く側になっているのか。だが、よくわからぬまま、Facebook と曖昧に関わり続けている一教員として、ありのままを披露することで、まだ接したことのない方々には何らかの参考になり、また熟練した方々からは何らかのご教示をいただけることを願い、筆をとらせていただくことにする。

1. Facebook との出会い

そもそも自分がなぜ Facebook 中に居場所を得ることになったのか、そのきっかけが思い出せない。最近、自分のホームページが「タイムライン」という表示形式に一新されたので、時系列をたどりやすくなった。それによれば 2009 年 8 月 8 日 17:50 に「私は猛暑の京都の大学でまだ働いています」と英語で発信したのが第一声となっている。恐らく海外で会った研究者か、留学生の誰かに返事をしたものと思う。ひとたび Facebook に関わり出すともっとも煩わしいことは、通常使用しているメーラーに、Facebook を差出人として、例えば「Facebook のお知らせがあります」などと題されたメールが頻繁に来るようになることである。（もっともこれは設定により回避できるらしいことを最近聞いた。）メールは次のような調子である。

「こんにちは、田中 多佳子さん

Aさんが、あなたがタグ付けされている写真について「いいね！」と言っています。

よろしくお願いします。」

「AさんからBさんと友達になりませんかという紹介がありました。」

「友達があなたの返事を待っています」

「Cさんが自分のウォールへの投稿にコメントしました。」

何が「タグづけ」か「ウォール」か、また「よろしくお願いします。」なのか意味もわからず、ただ煩わしく、一年くらい放っておいた。

2010 年、たまたまチケットが手に入り、タイトルの意味も知らぬまま、アメリカ映画「ソーシャル・ネットワーク」(*The Social Network*)を観に行った。日本語字幕には猛烈な速さで見たこともないカタカナ言葉の羅列が通り過ぎ、理解できない部分も多かった。しかし、Facebook なるものがどのような経緯で作られ、何故、大陸を越えて拡大し、国の体制すら変えてしまうような巨大なもう一つの世界へと成長を遂げたのかを、漠然と理解することができたと同時に、ある種の恐ろしさも感じた。

2. メーリングリストとしての活用

2011 年 10 月に所属学会の全国大会を本学で引き受けることになった。それに向けて 3 月に発足した実行委員会メンバー 10 数名によるメーリングリストが Facebook の中に作られた。Facebook に通じた人が、その中に閉じられたグループを開設し、招待された実行委員会メンバ

一が全員それに応じてそこに入るという形であった。互いの発言は特定のアドレスに投稿するか、それに返信する形でこのグループのメンバーだけに共有される。通常のメーラーにメールが来るし、自分の Facebook のホームページの中の当該グループに入っていけば、過去の発言の経緯も確認することができる。時にはそこでワードや PDF などの会議資料も共有して議論したが、私には技術的に文書のアップの仕方がよくわからなかった。いずれにせよメーリングリストとしては問題なく便利に使用できた。

3. 国際交流への活用：留学生たちをめぐるコミュニティー作り

本学で10年近く国際交流委員を勤めてきた私が、今、Facebook に最も期待を寄せているのは、本学への留学生たちとのコミュニケーション・ツールとしての機能である。

刻々と財政的に厳しさを増してゆく本学運営の中で、入試制度や免許パターンの見直しなどさまざまな改革が行われる中、本学に学ぶ留学生たちにも厳しい目が注がれるようになった。本学に学ぶ留学生数は正規生・非正規生を全て合わせると、30人台まで落ち込んだこともあったが、現在はほぼ60名弱が在籍している。一言で留学生といっても、入試に合格して正規の学部生・大学院生として日本人学生と何ら変わらない学生生活を送っている者、本学の協定校から一年間派遣されてくる学部レベルの特別聴講生、日本の国費により1年間さまざまな国から派遣されてくる学部レベルの日本語・日本文化研修留学生、同じく日本の国費により1年半各国から現役教員が派遣されてくる教員研修留学生など、年齢も国も日本語のレベルも研究内容や専門も全くまちまちである。そのような彼らに一斉に連絡をとるには、一括送信も掲示もあまり有効ではなく、本学在籍ですら容易なことではない。まして彼らが帰国後・卒業後、どうしているのかなど知りようがない。また、共通の授業もなく、国際交流会館だけでなく向島の留学生センターや下宿など、住んでいる場所もさまざまなので、留学生たち同志の日常的交流も難しい。さらに、国際交流委員会では「国際交流活動認定証 (ICEEC)」という学生表彰制度まで作り、腰の重い本学日本人学生たちの国際交流意欲を何とか高めようと努力しているが、日本人学生たちと留学生たちとが交流するツールもない。

そのような状況下で、数か月前、留学生会を束ねる留学生の一人が学生課の職員のアドバイ스로「「京都教育大学」から世界へ」というグループを Facebook の中に立ち上げた。グループのメンバーから「追加」されるとメンバーになり、メンバーは誰でも自由にメンバーを「追加する」ことができる。現在在籍する留学生はもちろん、帰国留学生たちや、過去の国際交流委員会関連教職員たち、国際交流会館のフェローやチューターたち、本学の研修・短期留学体験者たちなど、次々にメンバーが知っている人々を招き入れ、現在、メンバー数は140人を上回っている。

このグループの存在がとても実用的だと感じたのは、ある学生の「国際交流会館前の街灯がきれていて暗くてぶっそうだから気をつけてね」という投稿を読んだ時であった。学生たちもすぐに反応し、職員も機敏に対応することができた。国際交流会館集会室で留学生会が年に数回催しているパーティーの案内も、掲示やチラシよりはずっと効果的で周知が促進され、先日は卒業生の参加も見られた。まだそう多くはないが、海外の帰国留学生たちや短期留学中の日本人学生たちからも近況や「なつかしい！」などと近況報告が寄せられるようになった。会館の催しや留学生旅行の様子、さまざまな活動などの写真もアップされると、国内外のメンバーからの反応もよく、文字通りの「交流」が感じられ、会話も賑やかになってきた。もっとこの輪を広げたいものだと思う。

4. 活動記録の共有できる場、活動紹介の場として

Facebookは容量に制限がないため、写真や動画なども自由にストックしておくことができる。前項のようなメールのやりとりも記録としてそのまま残っていく。私が次に Facebook に期待するのは、共有の記録の保管場所としての機能である。大学のサーバーにも個人のサイトにも、関係者がいつもアクセスできるように共通の写真やメールを保管しておける場所はない。

今年度前期の留学生対象科目「世界の教育A」で日本の歌舞伎を紹介された垣内幸夫先生が、「授業内では時間が足りないが、隈取りを体験したい人には課外で応じてあげるので申し出なさい」と呼びかけられたところ、6〜7名の学生が名乗りをあげた。私はたまたま研究室におりノックに応じてドアをあけたところ、写真のようなすごいメイクの学生たちに驚かされた。彼らのポーズはモンスターのまねではなく、恐らく授業で習った「見得を切る」ことを実践しようとしているものである。垣内先生は、「全く同じ絵を見せてお互いに描き合わせたが、一人ひとり全く感性の異なる個性的デザインになるのが面白い」とおっしゃっていた。

私の撮ったこれらの写真をどうやって渡そうかと彼らに尋ねると、学生たちが「Facebook にアップして下さい」というのでやってみた。これらに限っては、誰かわからないので、個人情報ということをあまり気にかけることなくできた。インパクトが強かったようで、当該の学生たち以上に外部からの反響が大きく再度驚かされた。これらが伝統的な歌舞伎の隈取りであると紹介されても困りものではあるが…。



5. 卒業生たちの動向把握や音楽関係の情報交換の場として

私たちの教育の効果は、彼らが卒業後に教員や社会人となって初めて確認できる部分が多い。そんな教員として便利だと思うのは、卒業生たちのその後をしばしば垣間見ることができることである。また、昨今、大半の大学は自らの強力な潜在的応援団として同窓会や卒業生に注目している。ホームカミングデーなる場が本学にも設定されて久しい。音楽科でも茶話会を設けて、教員たちが卒業生たちを待ち構えているが、参加数は決して多いとはいえない。参加者は、年齢層が高いほど、個人宛に送付した案内葉書や直接の口コミによってたまたまその機会を知った人が多いが、卒業生の大半はホームカミングデーそのものの



存在すら知らない。関心があれば大学のホームページに掲載されているから知るはずだといっても、卒業生たちが日常生活の中で自分の卒業した大学のホームページを頻繁に見ることはまずない。

そんな中、最近、ふとしたきっかけから、担任していた学年の卒業生たちとのやりとりが始まった。タイの会社に勤務している者が「洪水はこんなにひきました」という写真をアップしていたり、アメリカ留学中の者からコンサートへの招待状が届いたり、誰が結婚するという話が聞こえて来たりする。意外に身近にいる卒業生ほど近況を知らないことも多く、たまたまコンサートなどで偶然再会した卒業生たちと、互いに名前を Facebook で探し合ってやりとりが始まったケースもある。リアルな世界で出会ってもメールアドレス交換というのはしばらく面があるが、互いに「Facebook でまたね」といえばバーチャルな世界での再会は意外に簡単である。

大学では卒業生たちのアドレスを把握することは難しいが、Facebook を利用すれば口コミ以上の広範囲、ホームページより限定されたターゲットに、直接、呼びかけをすることが可能である。もっと限定された「イベント」という機能を使い、チラシの PDF などとともに、特定の人々を「招待」することもできるようだ。私は招待されるばかりでする側としてその機能を使ったことはないが、招待された人は「参加する」と意思表示することもできるので、主催者側は参加予定数ある程度予測することができる。

また、音楽科はその特性上、教員も現役学生も卒業生も何かしら音楽活動や制作、もちろん教育にも関わっている。写真だけでなく動画も音のファイルも気軽にアップできるし、互いに上記のようなイベントに招待し合うことで、現在、どんな活動をしているか知ること、時間が合えば実際に外向くこともできる。Facebook はそうした具体的・立体的な情報交換のツールとしても有益かと思う。

6. Facebook 活用の課題と問題点

Facebook 活用にあってやはり一番恐ろしいのは個人情報の扱いである。Facebook は原則として、実名で一人が一つのアカウントをもつことを前提としている。そして各人を紹介するために性別や年齢、居住地や勤務先、血液型や誕生日、趣味など書き込む欄が用意されている。私は性別と誕生日、居住地のみしか登録していないが、確かに名前だけだと多くの同姓・同名者があり、漢字でなくローマ字で登録している人も多く、人物の同定が難しい。実際に岡本正志先生を Facebook の中で探した時にはその状態で、結局、生身のご本人に直接確かめたくらいである。

Facebook のネットワークは、基本的に具体的に知っている人に自分から「友だちリクエスト」を送り、相手が「承認」するとコミュニケーションがとれるようになる。そして設定に気を配らないと、「友だちになった人」全員に自分の掲示板（ウォール）の記述や写真のすべてが見られるどころか、友だちたちに先述のような案内メールが届けられることになる。「友だち」というくくりで、家族から同僚、研究仲間や友人、留学生や現役学生まですべて一括して見られることにはやはり抵抗があるので、もちろんウォールへの記述内容はかなり限定される。

一方で、自分が「友達」と認めた人々全員の間、互いの会話が公開される。さまざまなレベルの友人に、不必要にプライベートな情報が明らかにされる。恐らくその内容が自動的に分析され、それに応じて個人個人にもっとも効果的と判断された広告が配信される。だからこそ、企業にすれば Facebook の宣伝威力は大きく、世界の一大企業にのし上がったわけである。

実際に、数日前のニュースで、Facebook の調査結果が発表され、6 月末の時点で、過去 1 ヶ月

の利用者 9 億 5000 万人のうち 8.7 パーセントが、二重登録者や虚偽の登録者であると公表された。二重登録ではなくとも、知人の中には、実名でなくニックネームのように実名を少し変型させた仮名を使用している人や、わざと異なる出身地を「沖縄」などと変えている人もいる。自分の顔写真を公開するということにはかなりの抵抗があるのでホームページにはインドの楽器の写真を掲載している。同様に愛犬など動植物や、自分の顔にしてもシルエットや過剰な化粧を施したり特殊な角度から写したりした写真を使用している人も多い。そこまでしているのに、例えば、留学生たちから、ある日突然、それこそ「タグづけされた写真」が自分のホームページに張り付いていて度肝を抜かれたことが何度かあった。初めはそのタグのはずし方がわからず当惑したが、詳しい学生に聞いてやっと自分用にダウンロードし、ホームページからは削除することができるようになった。

先日の留学生旅行の全員の集合写真も飛んで来た。その下に、「この写真に写っている友達」として一部の人の名前が書き出され、おまけにその名前にカーソルを持ていくとその人が写っているあたりを大きな四角で囲む表示がでるのである。さらに、スマートフォンで Facebook を利用している人々の中には、本人が意識的にそうしているのか否かわからないが、GPS 機能によってその人のホームページには、タイムラインの中にいつどこにいたかという地図まで表示される人もいる。そういった現象に触れると思わずぞっとする。

個人情報保護のための機能強化は、Facebook の中で行われていて、さまざまな設定が可能なようである。しかし、それらの機能を熟知し巧みにプロテクトをかけながら使用できるユーザーがどのくらいいるのだろうか。情報の共有や自由な議論と、個人情報の保護のバランスは一体どうとったら良いのか。便利さと、それが他人の目にさらされ巨大なスケールで管理されている恐怖とをいつも天秤にかけて接しているような気がする。